観光開発のはざまで：ラオス、カンボジアの観光政策とその国境地帯における影響

西村正雄

序


このメコン川沿いの国々がいま最も力を入れているもう一つの開発が観光開発である。今日北は中国から南はカンボジアまで、観光開発に特に力を入れており、観光開発こそまさに各国政府の経済政策の中心的な柱となりつつある（Cambodia Development Resource Institute ed. 2007; Leebouapa, et al. 2007）。観光の増進のため、これらの国々は観光資源を新たに開発することに力をそそぎ、観光客数を増大させるため、様々な政策を実行してきた。これらの国々が観光開発に力を入れる理由は、それがもたらす大きな収入にほかならない。しかしその収入重視の考え方は、ユネスコ関係者が指摘するように、そもそも出発点から誤った仮定の上で組み立てられてきたように思われる（Cuellar ed. 1996; Engelhardt 1999, 2001）。一つは、観光は大きなインフラの整備なくして簡単に達成できる産業である。第二に、他の産業と異なり、観光はクリーンな産業である、という誤解である（Engelhardt 2001）。

しかし、こうした指摘にほとんど注目せず、この誤解の上にたって、東南アジアの多くの国で観光は貧困から抜け出す最も効果的な手段として、多くの期待を寄せ、開発に邁進してきただ。その先頭を走り、陰に陽に他の国々に観光開発のモデルを提示してきたのがタイである。タイでは観光によって貧困削減がある程度成功したと考えられている（Pupphavesea, et al. 2007）。タイは1960年代より本格的な観光開発を行い、常に観光を国の第一の産業として位置づけ、その増進のため様々なキャンペーンをはり、政策を実行してきた。その結果、タイは多くの問題を抱えながらも、観光が国の収入の第一を占める状態となってきた（Pupphavesea, et al. 2007）。この成功に近隣
の国々は数々のまなざしをむけ、またそれが刺激となって、タイ式の観光開発をモデルとして同じような観光開発を行いつつある（Ballard 2007）。

本論文では、タイと国境を接しながら、後進で観光開発を推進する2つの国：ラオスとカンボジアの観光開発の現状を検証し、特にこの2つの国で、観光開発の影響がどのように現れているのかを、国境地帯：ラオスのチャンパサック（Champasak）県と、カンボジアのストゥン・トレン（Stung Treng）州においてフィールドワークを行なったデータを基に論じてみたいと思う。

I. メコン川流域の観光開発の現状

カンボジア開発資源研究機関（Cambodia Development Resource Institute）の調查によれば（Cambodia Development Resource Institute 2007: 5）、2000年から2005年までの6年間、観光がメコン川沿岸国のGDPに占める割合は、中国雲南省の年平均12.3%を筆頭に、カンボジア9.2%、ベトナム7.8%、ラオス7.5%、タイ5.7%と続き、どこも平均5%以上にのぼり、その率は今後ますます増加する傾向があるという。この傾向を受け、各国政府は観光開発にますます力を入れ、観光からの収入を増やすための政策立案にしがみを削ってきた。

その後の中で、最も重要なのか国境における規制の緩和であった。今日、上記の国では、ビジネスの手続きの簡略化、入国税の撤廃もしくは軽減、荷物検査の簡素化など、人々が入国しやすいよう入国業務の簡素化がなわれている。

さらに、観光客へのサービスの向上のため、世界銀行、アジア銀行、さらには国際援助を通じて融資を受け、道路整備、ホテル、リゾート開発がなわれている。一方、ラオス、カンボジアなどで特に顕著なのが、民間のセクターにおける投資の増大を促す政策である。その他から、ラオス、カンボジアでは、マレーシア資本、タイ資本などによる開発が各地で見られるようになっている。

こうした中、それぞれの国の観光政策担当者は、いかに外部から資本を招き入れ、少しでも多くの投資をしてもらうか競い合っており、そのために、次々と投資のためのサイト開拓、すなわち新たな観光地点の開拓に進んでいるのである。ここでは、観光客の数を多くすることが、観光政策の根拠にあるように思われる。

II. 観光政策と国境政策

人類学が国境地帯に注目してきたのは、1980年代からでそれほど長い歴史があるわけではない。国境地帯への注目は、国家、民族といったテーマが人類学の中で中心的になってきたといわれるポストコロニアルの人類学に関連している（西村2007d）。そこでは、旧植民地の独立後の政治的、経済的状況の中で文化の問題を考えることから、国境を意識した人類学が生まれてきたといえる。

しかし、1980年代、1990年代における国境地帯の人類学的状況は、まだ、国家や民族を考える人
観光開発のはざまで：ラオス、カンボジアの観光政策とその国境地帯における影響  

類学的統計学的統計研究の副産物的なものだったといえる。その研究の中で、次の5つの特徴があった。いわゆる世界システムの拡大にともなう国家間の格差の問題を問うもの：2）独立後のアフリカ等の諸国と旧植民地宗主国との関係を問うもの：3）世界システムにおける経済的動向、とくに国家内における民族間の対立、差別の問題を問うもの：4）国家のアイデンティティ、民族のアイデンティティについての問題を問うもの：5）国家、民族を超えた人の移動（移民、難民）に関する問題を問うものである（西村2007d：1）。

このうち、国家、民族の枠を超えて人々が移動する現象は、その後のグローバル化の研究の中に関じ込めつつ、より大きな設定の中で語られるようになる。研究の中心がグローバル化の影響、グローバル化そのものの存在定義に移る中で（例、Appadurai 1996）、現象としての人、モノ（金銭、アイディア、情報の流れを全体論的に見てゆく傾向に変わってゆく。観光に関する視点もこの流れの中で、人類学的な総合的なアプローチが生まれてくる（例、Burns 1999; Nash 1996）。

こうしたグローバリゼーションの一言でぐくまれてきた現象は、実際には極めて多くの多様性を含み、一見するとまるでランダムな要素がランダムな動きをしている現象に見える。それをそのまま放置すると国家の存亡にかかわらないことができないことを認識している国家等の行政機関（政府）は、当然のことながらその動きに規制をかけてくる。この規制が比較的にはっきり見えるのが国家の周辺部であると考えられている（Asad 2004; Das and Poole 2004）。周辺部とは、国境地帯、また国家の中での紛争地帯、民族間のボーダーを含むところである（Das and Poole eds. 2004）。こうした地帯では、国家は、そのパワーを示す意味で、規制を枠を定規にあてはめ、国家の統制を行うとしている。このため、国境では厳しい入国管理があり、紛争地帯では数々のチェックポイントが設かれ検問がなされてくる（Jeganathan 2004）。さらに民族のボーダーでは、言語教育など教育の面からの規制がかかれている。このことは、国境等はその地域の行政機関の政策がはっきり見える場所であることを意味している。

しかし一方、私が述べてきたように（例、西村2007d）、国家の規制とは異なった動きをするものにとって、国家の周辺部はまた活動の場所の空間を提供している。こうした規制をかいくぐり、規制に柔軟に「適応し」、規制さえも自らの生活の中に取り組んできた。このことが、今国家レベルで観光開発に適応し、その関連で国境政策を変えようとしているラオス、カンボジアで特に顕著に見られるように思われる。後で述べるように、そこでは、ラオス、カンボジア側にかわり人々が予測ができない事態にそなえて、それぞれ柔軟な適応をもって生活してきたのである。

Ⅲ．事例研究：ラオス-カンボジアの国境地帯と観光

A．チャンパサックの地理的背景と観光資源開発

ラオスは北で中華人民共和国とミャンマー、西はタイ、東はベトナム、そして南はカンボジア

チャンパサック県は、西はタイと、南はカンボジアと国境を接している。チャンパサック県は、タイとの国境を形成する山塊とメコン川に囲まれた一種孤立した土地となっており、そこにアクセスするにあたって従来メコン川を渡るか、タイ側から山塊の視野をめぐる道路をたどる必要があり、交通の便の点で一種「不便」な所であった（図1）。しかしながら、この不便さがこの地域の有形・無形の遺産を、比較的よく保存してきた要因となってきた。このような地域はほど毎年かいま観光資源の対象として、開発されるのを待っている状態である（例、Lao National Tourism Administration 2008, 2007; Tourism Administration of Champasak Province 2007）。

チャンパサックとカンボジアの境界地域は、自然資源も豊かである（図1）。チャンパサック内を流れるメコン川は南下してカンボジアに入る。カンボジアとの国境は、メコン川が断層を流れるため、流れの急な滝となっており、今日コーン滝や、また拡大したメコン川内に多くの岩礁、小島があり、フォーサウザンド・アイランドと呼ばれ、風光明媚な観光地となってきている。ラオス政府はこれらの自然資源をもまた観光資源としてとらえ、ユネスコの世界自然遺産への登録を視野に入れて、観光開発に乗り出している。

図1：ラオス、カンボジア国境地帯（Source: Nelles Maps）
観光開発のはさまで：ラオス、カンボジアの観光政策とその国境地帯における影響

(Tourism Administration of Champasak Province 2007)（図1）。

B. ラオスの観光政策

ラオスにおいて、観光は今や第一義的な産業になり、これに対する期待は、中央、地方、そして一般の人々のレベルまで浸透しており、期待はますます増大している（例、Lao National Tourism Administration 2008; Tourism Administration of Champasak Province 2007）。この中では特にチャンバサック県は、中央政府以上に、極めて熱心に観光開発に取り組んできた。チャンバサック県政府は独自に観光開発について見解を持っているようである（2005年9月及び12月の県観光局長インタビュー）。

県政府として確固とした戦略のもと、観光政策を実行しようとしている。それらは次のようく

集約される（西村2007; Tourism Administration of Champasak Province 2007）。

1）カンボジア、ラオス、タイの国境地帯を「エメラルドの国境地帯」と称し、カンボジアのアンコール遺跡を訪れる観光客をチャンバサックに誘致する。

2）タイからの陸路を整備し、タイの観光客がチャンバサックに来やすい、道路整備等を行う。

3）カンボジア、タイとの国境の通過をより容易にする。そのため、入国手続きの簡素化をおかし、短期観光のための滞在者に対しては、ビザ無しで入国できる措置をとる。陸路のチェックポイントばかりでなく、パクセの空港を国際空港とし、そこでパスポートコントロールができるようにする。

4）チャンバサックの文化的付加価値をつけるため、少数民族村、文化村、またワット・プーを中心とするチャンバサック世界遺産地域内の一層の整備をはかる。そのために、メコン川沿いにブームナダやサイクリングロードなどを造る。さらに文化村などで、チャンバサックの織物、踊りなどを見せる。メコン川でポートレースなどの行事を見せる。

5）カンボジアとの国境地帯を形作る急流、滝などの景観、またその生息する淡水魚イルカなどの生物の保護を合わせて、一体の自然をユネスコ世界遺産として登録し、観光開発を行う。こうしてカンボジアのアンコールからワット・プーまで切れ目無く続く観光のベルト地帯をつくる。

6）観光客の数を増やすため、観光地点のさらなる開拓につとめ、そのための調査を行なう。

7）エコツーリズムの一層の充実をはかる。

一方、住民は社会主義体制下で、ほとんどすべて政府関係者の意見に追随する形をとってきた。われわれが調査している世界遺産地域内における3つの村：ノンサ村、チャンバサック・クウン、パビン村、また国境地帯のヴァンカム村、そして県都のパクセのいずれにおいても、住民は世界遺産とそれに伴う急速な観光開発に対して肯定的な意見を述べ、観光開発は1）収入が増える；2）チャンバサックを多くの人に知ってもらう機会が増える、の2点で常に積極的に賛意を述べる。
できた（2005年、2006年チャンバサック郡における住民へのインタビュー）。

このことから、住民が再び批判的な自らの意见を述べないまま、チャンバサックは表面上一丸となって観光開発を進める方向で動いているように思われる。すでに、チャンバサック県政府の幾つかのフランについては、ADB（アジア開発銀行）などの資金援助を受け実行段階に移っている。2006年から2007年にかけて、チャンバサックには、メコン川の中洲であるドンデン島に、その砂浜を利用しつつフランスのテイストをもったコテージの建ち並ぶ「文化村」が完成し、そこだけ欧米風の異質な空間を作り出している。さらにメコン川対岸で世界遺産地域内にあり、ワット・ブーとならんでもう一つの大きな遺跡であるトモ（Tomo）遺跡周辺をめぐるサイクリングロードの建設が出来つつある（西村2007c）。急激に変化しているランドスケープ(3)は、チャンバサックの人々の期待の大きさをそのまま反映しているように思えるのである。

すでに見ってきたように、チャンバサックの観光開発は、ラオス南部が国境を接する国々（タイ・カンボジア・ベトナム）との連携のもと、それらの国々からの観光客（必ずしもその各国の人々ばかりではなく、それらの国々をめぐってラオスに来る国際観光客も含む）をチャンバサックに誘導しようとする意図／誘導できるという仮定のもとに行なわれてきている。この実施は、当然ラオスの中央政府が、ASEANの一員として対外的に約束してきたASEAN域内でのモノ・人の移動の自由化の路線に沿うものであるものの、その実施の仕方はそれぞれ国境を接する県によって対応のやり方に多様性が見られる。その中で、とりわけチャンバサックの積極的な対応が目立つのである（Lao National Tourism Administration 2006; 2005年、2006年チャンバサック県政府観光局長へのインタビュー）。

ラオスにおける観光開発は、タイにおける観光産業の興隆を見ながら、明確に大統領令のような形でタイをモデルとはしない中でも、タイ型の観光開発を目指していることははっきりしている。チャンバサック県政府観光局の人々は頻繁にタイに赴き、観光開発の観察を行なっており（2004年チャンバサック県観光局関係者とのインタビュー）、いわゆる「アメージング・タイランド」方式の、「なにかエキゾチックな文化」を発見させて、それを全面的に売り出すやり方をとり始めている。このため、ここ数年、特に世界遺産登録後、チャンバサックでは、急にチャ

図2：世界遺産登録後のワット・ブー・フェスティバル（Source: T.D.N）
観光開発のはざまで：ラオス、カンボジアの観光政策とその周辺地域における影響

観光開発の過程で、いわゆる「少数民族」を観光資源化する方向に動かされている。観光開発のプランナーは、ともと周辺化されてきた人々に、今度は新たな「産業的」価値を見出している。このため、毎年2月に行なわれるワット・プー・フェスティバルでは、少数民族の衣装をまとい、道具をもった人々のパレードが盛に行われるようになってきた（図2）。しかしながらそれは、周辺化されの人々を対等にとらえ、彼らを中心にすることではなく、周辺におき続けることで生み出す価値を新たに見い出しているように思われるのである。

C. 観光化へむけて：一例としてのチャンバサック世界遺産登録後の動き

こうした上で決定された観光政策が、実際にどのように施行され、どのような結果をもたらしているのか、チャンバサックの世界遺産の場所が良く示している。

2001年12月にチャンバサックは、世界遺産に登録された。この登録に先立って、日本政府は、ODAの新たな種類として、文化無償援助を設立していた。この援助先に、ラオスを考え始めていった。このためのヒアリングと調査、ラオス中央政府関係者の折衝が始まっていた（西村2006a、2007c）。そして、2002年、日本政府は援助を決定し、援助の準備に入った。その内容は、ワット・プー境内内の排水路の整備、遺物貯蔵施設の建設、旧王朝時代の建物の撤去及び、ワット・プー入り口周辺の整備であった。実際の日本からの専門家の派遣を前に、地元ラオス政府に、そうした工事のための資金を手がけたと、これからの貯蔵施設の建設用地の整備が課せられた。このプロジェクトは、日本政府とラオス政府との二国間援助の形態をとっていたため、名目的なプロジェクトの契約相手は、ヴィエンチャンのラオス中央政府であった。しかし、プロジェクトの実際の推進者は、地元の県と郡レベルの政府関係者であった。このことが後に、チャンバサックのランドスケープの大きな変更をもたらす要因となった（西村2006a、2007c）。

もともと、チャンバサックは、地域主義の強いところと認識され、ユネスコの世界遺産プロジェクトの推進においても県レベル、郡レベルの政府は、独自の主張をしてきた（Nishimura 2004a; Nishimura and Sikhanxay 1998）。この「強い地域主義」が、世界遺産登録後現れてきた、世界遺産登録の最もポイントは、保存・修復のためのゾーニングの設定である。

ゾーニングは、三つの分類でなされた。第一は、研究調査すべきゾーンとして、最重要的地域で、もっとも厳しい規制が課せられた地域である。ワット・プーとその周辺地域、古代都市（シェスタプラ）地域、クメールの街道の一部がこのゾーンとして設定された。この地域では、あらゆる建物等の建築、道路建設等が基本的に禁止されることとなった。

第二のゾーンは、この区域の自然を保護する目的で設定されたゾーンである。このゾーンには、カオ山を中心とする山塊すべて、メコン川の一部が含まれる。特にカオ山を中心とする山塊全てが含まれていることは非常に重要な意味がある。チャンバサックに遺産が造られた意味に関する指定となっている。このランドスケープ（景観）こそ、この地に人々が集まり、生活を営んでき
た源と考えられるため、チャンバサックに関しては、個々の遺跡の存在する根源的な意義となっている景観の保存が重要となってくるのである。

第三のゾーンは、第一、第二のゾーンを含みつつ、より広範な地域にあてられている。この地域は、チャンバサックの人々のほとんどが暮らしている場所である。このためこのゾーン制限は事前の文化人類學的調査の結果が生かされている。このゾーンの基本的なコンセプトは、住民の大部分を占める農民の現生活を維持継続することを目的としている（Government of Lao PDR and UNESCO 2001）。

こうしたゾーニングは、開始に関して独自の考えを持ってきた県、郡という地方レベルの政府機関にとって、その考えを対立するものであったようである。このため、地方レベルの行政担当者は、一応ユネスコと中央政府の考え方に対し大枠で同意を示しながらも、細部の点で自分の考えを示そうとした。また考えを実際の行動の中で示してきた。先に述べたように、文化無償援助の実際の実行は、地方レベルにまかされていたため、この細部の段階で地方レベルの考え方が大いに反映されることとなった（西村2006a、2007c）。

2002年5月、県政府と郡政府は、貯蔵庫建設用地を整備することと、排水路等を建設する機械置き場の整備に着手した。かねてから、ワット・プー遺跡周辺を、「遺跡公園」化したいと望んでいた（Nishimura and Sikhanxay 1998）地方レベルの政府関係者は、この機会をとらえて、その実行にかかった。用地整備を拡大解釈し、広大な土地をその目的に必要なものとして接収した。その結果、ワット・プーに隣接する、ノンサ村の100戸以上の強制移住させられることになった。移住させられた人々は、近くの土地を与えられ、そこに新しい家を作り生活を始めた。

強制的に接収されたワット・プー周辺はゲートができると同時に、フェンスで囲まれ、整備された。しかし、かつて村人が、農作業のために、自由に使用していたバラ15からの水の供給がなくなり、この結果、ノンサ村に属し、ワット・プーに隣接する多くの水田が耕作困難なものとなった。

多くの農民は、表向き観光化に賛意を表しているが、内心不満を抱いているものが多い。特にゾーン1に入れる農民たちは、かつて生活していた場がフェンスで入れなくなったことを不満をいただいたが、この結果、しばしばフェンスが破られ、そこに元のように自由に出入りしたいという意思表示が見られる。それは、農民たちが生活の現状維持を望んでいることを示しており、そのためのきびしい抵抗と見ることができると（西村2006a、2007d）。

この地域のランドスケープの変更は、まだ続いている。地方政府は、さらにワット・プーへのアクセスの便をよくするため、アクセスをここに続く新しい道路の建設を開始した。また、メコン川沿岸の景色を整備するため、それに沿った村の移動を考えている。このように、地方レベルの政府の段階で、遺産の「公園化」が進んでいる。これは、ユネスコが考えてきた、ラオスの人々による遺産の保護が、異なって解釈されていることを示している。すなわち遺産は観光開発の資
D. カンボジアの観光政策と人々の反応

－スートン・トレン州の現在－カンボジアから見たラオス国境－

一方、国境を挟んで南に位置するカンボジアは、アンコールのあるシェム・リアップを中心に、ラオスよりも先行して観光開発を行なってきた。そのカンボジアの人々は今国境を開きつつあるラオスをどのように見て、ラオスの観光開発に対応しようとしているのか調べることは重要であると考えた。考古学的、歴史的そして人類学的調査が示してきたように、もともと現在の国境線が設定される以前、チャンパサックとカンボジアのスートン・トレンは文化的にモザイク状を呈しながらも連続性を維持してきた。このことは、本来直線的な国境の線引きをすること事態無理があることを意味している（例、Bruguier 2005; EFEO 2005; Lefèvre 1995; Try and Chambers 2006）（図1参照）。

私は、観光開発と国境政策の地元の人々への影響を調査するため、ラオスと国境を接するカンボジアのスートン・トレン州において2006年以降フィールド調査を行なってきた（西村2007d）。調査内容は、国境を接する町で州都のスートン・トレン（Stung Treng）と、オ・スヴァイ村（Ou Svay）にて住民へのインタビュー調査の形をとった。

調査では、2つの点を明らかにすることに集中した。一つは、住民の生活調査；もう一つが、最近における生活の変化である。スートン・トレンの町でゲストハウスを営むA家族は、そこに代々住み着いており、以前はレストラン、雑貨商などを営んできたが、近年国境が開き、ラオスへの玄関口として重要性を増し、観光客が増えたことを予想し、その期待感からゲストハウス経営に乗り出し始めた。もともと家族は多く、家・敷地などの財産は妻方のもので続いてきたが、妻方の親族、夫方の親族を含めてその世帯内での人口は増えつつある（西村2007d）。スートン・トレンはメコン川、および支流のセコン川に面しており、ブノンペンから続く道がさらにラオス側に延びてゆく計画があり、そのため2007年まで川にかかる橋が建設途上となっていた。橋の工事が途中で止まっていることについて、A家族の全員が、ラオスを非難している。すなわち、「ラオスは、開発に全く関心がなく、それどころかカンボジアからの物資・人が流れ込むことを阻止するため、橋を造らせず、また道路もメコン川の対岸から舗装もされず悪くなる」と述べている。この意見は、A家族に特有の考え方ではなく、少なくともスートン・トレンの町の住民が一般的に持っている感情であるように思われる。国境地帯のカンボジア人の対ラオス観は、ネガティブなものを越えて、むしろドラッグ取引など、すべての悪はラオスが原因と言わんばかりのものであった（2007年インタビュー）。川の船着場での船頭、車の運転手、船の乗客の意見も同じであった。

要するに、カンボジアの人々にとって、ラオスは開発に関心のない、後ろ向きで発展性のない
国として、映っているようである。しかし興味深いことに、この国境を越えて、実はラオスの人々とカンボジアの人々は頻繁に行き来している様子も見られるのである。一方、後で述べるように、対岸のチャンパサックはいま経済発展を目指して突き進んでおり、その県都のパクセは、「ブーミングタウン」の様相さえ示している。このため、ストゥン・トレンの住民、さらにその周辺の住民はラオスへ出稼ぎに出る現象が出てきている。しかしこのことは、カンボジアの住民のラオス観を変えるにはいいたっていない。

私は、このラオス観が村のレベルでも見られるのかを調べるため、メコン川を渡ったところに存在する村、オ・スヴァイ村において調査を行なった。オ・スヴァイ村は、国境警備の目的で、シアヌーク前国王時代1960年代に兵士を配置したのがそもそも村の始まりだと言われている（2008年村長のインタビュー；Try and Chambers 2006）。このため、歴史的には比較的新しい村である。しかし、国境に最も近い村で、ラオスとカンボジアの国境政策の影響を一番受けていている村の一つである。オ・スヴァイ村では、本村から少しはなれた国境線に店を持つ住民B家族と、オ・スヴァイ村本村に住むC家族に、インタビュー調査を行った。B家族は、40代の夫と30代の妻、子ども3人の核家族で暮らしている。ここでは夫はカンボジア人、妻はラオ人であった（西村2007d）。一般に、カンボジア、ラオスとも結婚後は妻方居住となる場合が多いが、国境地帯ではその慣習をどおり行かない事情がある。ラオス・カンボジアの国境は、ラオス内戦時は、ラオスからの難民がカンボジアに逃れる場所となり、そのためストゥン・トレン州内にはラオス人のコミュニティができている（例、Evans 1996）。こうしたコミュニティ通しの通婚も見られる（例、Leebouapao 2006）。

一方、カンボジアのボル・ボト時代には、その圧制を逃れてカンボジア側から人々がラオス側に難民として逃れてきた（Cambodia Development Institute ed. 2007; Ebihara, et al. eds. 1994）。さらに、ボル・ボト派の兵士がしばしばラオス側に侵入して報告されている（2000年チャンパサック県政府関係者へのインタビュー）。こうした状況で、慣習はそのまま貫かれていない。

B家族は、国境線上の村で、雑貨屋、みやげ物屋を営み、カンボジアとラオス、両方からの訪問者を相手に商売を営んでいる。店頭にならぶ物資は、カンボジアとラオス両方からのものである。例えば、ラオスのもち米を入れるバスケット、また、ビール、カンボジアの繊物、タイのドリンク、またプラスチック製品などである（西村2007d）。親戚関係など個人的なコネクションを生かして信用取引をして物を仕入れる、昔から続いてきたボーダーテーブルのやり方がここで見られるようである（例、Leebouapao, et al. 2006; 天川編2004）。B家族の主人は、物資の仕入れは、自分の親族とその知り合い、また妻方の親族とその知り合いが関わると述べている（2006年オ・スヴァイ村でのインタビュー）。そこを訪れる客は、ラオス側からの人々が多く、顔なじみにまじって、観光客も増えてきているという。ラオス側からの人々は、そこで仕入れを行なっているようである。
オ・スヴァイ村の世帯の多くは、農業と漁業で生計をたてている。しかし近年、観光客が増大していることは認識しており、一部の人々の中に、彼らを川に案内する仕事も生計に占めるようになっている。しかし近年の観光開発が土地の価値、高騰、利用制限などを生み、その影響をまともに受けてきた近隣の村の人々がいることを認識しているオ・スヴァイの人々は、同じことが彼らにも起こることを心配している。すなわち彼らの暮らし環境、特に川の環境への規制を懸念している。土地の賃金等で追い出されて、もはや農業が出来なくなった人々は、ますます漁業に依存してきており、漁業の中で権利の争いが起きており、またその漁業も観光開発により出来なくなってくることへの懸念である（2007年オ・スヴァイ村でのインタビュー：Try and Chambers 2006）。すなわち、カンボジア側の人々は、観光開発のネガティブな側面を認識しており、中央・地方政府主導のもと、観光開発のポジティブな面のみを見ながら、住民を含めて一気に進んでいるラオスと対照的な様相を示している。

IV．まとめと結論

ラオスは、1986年以降のチンタナカーン・マイ政策、そして1997年のASEANのメンバー国になるなど、開放政策をとることにより、東南アジアのコミュニティの一員としての役割を着実にはたすようになってきた。この間若千の振りもどしぶつもほぼ確実に市場経済化へ向けて進んできた（天川編2004；天川、山田編2005）。この中で、最も重要なのが、こうした自由化政策以前から重要であった国境地帯でのいわゆる「ポーダー交易」を含む国境地帯の開放の問題であった。チンタナカーン・マイ政策によって特に2004年、ラオス政府はポーダーポイントでの物、人の流れをよりスムーズにするため、①貿易関連サービスの円滑化；②輸出入ライセンスの廃止の方針を打ち出してきた（Leebouapao, et al. 2006: 83）。この効果はすぐ現れる。ラオス国内の物資の種類、量が格段に増してきたのである。そして観光開発もそうした政策の一環として行なわ
れてきた。それは、観光客の数をできるだけ増やすという、質よりも量の観点から政策が立案されてきた。結果的にビザなしで入国できるチェックポイントを増やす事で、人の流れもよりよく、そして増大してきている。カンボジアとの国境もこの流れに乗り、制度としての障壁は低くなりつつあるように思われる（西村2007d）。

しかしながら、私の調査では、別の中壁が高くなりつつあるのが見てとれる。先に述べたように、カンボジアでは、すでに国境沿いの土地利用の制限がなされ、人々の生計経済のパターンに変化が生じている。それまで代々続けてきた生活の維持への懸念があり、その人々は観光をむしろネガティブにとらえている。そしてその懸念を外へ、すなわち、ラオスへ転嫁しようとしているように思われる。

一方ラオス政府、そして特にチャンパック県政府の戦略は、観光産業の急速な促進であり、比較的単純に、制度的バウンダリーを低くさえすれば、カンボジア等からチャンパックへ観光客が増大して、それは直接収益の増大につながると考えている。これを刺激するため、次々とあらたなる観光地の開発を行なっている。チャンパックの遺産、少数民族の文化を観光のための資源と見做し、それらを全面的に売り出す方向に進んでいる。このことは、チャンパックとして、他との違いを明確にする必要性に迫られていることを意味している。先に述べたようにチャンパックは、本来、クメール文化の影響を受けた土地として、カンボジアのストゥン・トレンとはっきりと線で分ける必要があるとは限らない。しかし、観光的付加価値をつけるため、あえて違いを強調する必要が出てきているのである。これが、ラオスのみに存在する少数民族を意識的に表に出すこと、ラオス的と「信じられる」音楽、織物、色合いなどをことさら強調する事、さらには、新たな考古学的遺跡の発見に至っており、すなわち今ボーダー地帯で起こりつつあるのは、制度的バウンダリーが低くなるのと相反して、「違いの検出し」であり、そうすることで文化的なバウンダリーが高められつつあるように思われる（例、神澤2003；カムボン2003；カムベール2003；小山2005；西村2007d）。

今回のフィールド調査を通して見えてくるものは、国境地帯は、従来考えられてきた周辺化されたところではなく、まさに社会-政治的な、また社会-経済的なあらゆる活動が集約し、具現化されているところで、むしろ中心的な様相を示しているというものである。その国の政策が集中する一方、そこに暮らす住民たちも、それを最もよく理解し、なんとか柔軟に、新たに生まれてきている状況に適応して生活を着こなしている。それは従来の経験から、とくに社会主義の体質のラオスでは、またいつかそれを変更するのか予想するのは困難である。こうした不測の状況への適応が、まさにボーダーで生きる人々の生活の仕方なのである（西村2007d）。

いま、制度としてのバウンダリーが低くなり、一見するとボーダー地帯に住む人々にとってより良い環境ができつつあるように思われる。しかし、ラオス・カンボジアの国境地帯を見る限り、それに変わって高まりつつあるのは、あえて文化のちがいを強調した文化的バウンダリーが高まっ
てきている状況が見られ、それが今後どのような効果をもたらすのか、予測のむずかしい状況となっているのである。

注
（1） ここに使用している「ランドスケープ」は、地理的な意味での景色を示す言葉としてではなく、文化人類学的な意味での人々の生活空間という概念で使用している（たとえば、Appadurai 1996; Hirsch and Hanlon eds. 1997）。
（2） バライは、ヒンドゥ寺院に付随する人工の池で、そこで身を清める意味、また宗教・神話の世界の海のランドスケープを再現したものと考えられている。ワット・ブー地域に関して言えば、もっと実際的には、そこで貯えた水は乾季の時の生活用水、農業用水としても使われた（Berval ed. 1959; Government of Lao PDR and UNESCO 2001）。
（3） 2008年桝は開通した。それを建設した中国政府の、インドシナ半島を南北に縦断する道路をつくり、資源の輸入と自国製品の輸出、そして自国民の進出を促す、強い意向が反映したものと思われる（2008年ストゥン・トン政府関係者、および住民へのインタビュー）。

参考文献
Appadurai, A.

Asad, T.

Ballard, B. M.

Berval, R. de ed.

Bruguier, B.

Burns, P.

Cambodia Development Resource Institute ed.

Chandler, D.

Cuellar, J. P. de ed.,

Das, V. and D. Poole eds.
2004 Anthropology in the Margins of the State. Santa Fe: School of American Research Press.

Das, V. And D. Poole
2004 “State and Its Margins: Comparative Ethnographies.” In Das, V. and D. Poole eds.,
Lao National Tourism Administration (Planning and Cooperation Department Statistics Unit) 2006 2006 Statistical Report on Tourism in Laos. Vientiane: Lao Tourism Authority, Lao PDR.
Nash, D.

Nelles Maps

Nishimura, M. and P. Sikhanxay
1998 *Capacity Building in Cultural Heritage Management within the Context of Assistance for the Preservation of Wat Phu (536/LAO/70).* Terminal Report (FIT/536/LAO/70) Submitted to UNESCO.

Pottier, J. A.

Pottier, J., A. Bicker and P. Sillitoe eds.

Pupphavesa, W., J. Panpiemras, and C. Anuchitworawong

Sikhanxay, P.


T.D.N 出版年不明 Post Card LG383, Vientiane; T.D.N.

Try, T. and M. Chambers
2006 *Situation Analysis Stung Treng Province, Cambodia.* Vientiane, Lao PDR: Mekong Wetlands Biodiversity Conservation and Sustainable Use Programme (MWBP).

Tourism Administration of Champassak Province

UNESCO


UNESCO/PROP

UNESCO/UNDP
ヤマシタ、S. and J. S. Eades eds.

天川 直子 編
2004 『ラオスの市場経済化－現状と課題－』。東京：アジア経済研究所。

天川 直子、山田 祐彦 編
2005 『ラオス－―党支配体制下の市場経済化』。東京：アジア経済研究所。

石田 正美 編
2005 『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所。

石田 正美
2005 『メコン川とメコン地域』。石田 正美 編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.11-40。

小笠原 高幸
2005 『メコン地域における開発協力と国際関係』。石田 正美 編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.41-62。

小島 聖治
2004 「長作、自給自足、家族と親族－ラオ人農民の日常生活と記憶に関する考察：1950年代から1975年を中心にとして。」。『文化人類学年報－特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学－文化遺産・記憶・地域文化－』第1巻（早稲田大学文学部）。Pp.31-43。

2005 「チャンパサックの日常生活－ドンクラートの形成と人々の生活およびその変遷」。『文化人類学年報－特集：ラオスとその周辺における遺産・モノ・生活－』第2巻（早稲田大学文学学術院）。Pp.25-37。

2007 「生活へのまなざし－チャンパサックにおけるフィールドワークの現場から」。ラオス地域人類学研究所 編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣、所収。Pp.111-131。

神澤 周
2003 『観光資源と開発』。西沢 信善、古川 久雄、木内 行雄 編、『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん、所収。Pp.256-270。

カムボン・ティーラブット（竹原 茂 訳）
2003 『南部ラオス』。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.71-92。

カムベアン・ティップムンチリー（竹原 茂 訳）
2003 『ラオス・中国国境』。ラオス文化研究所 編、『ラオス概説』。東京：めこん、所収。Pp.475-491。

川田 聖造、福井 勝義 編
1988 『民族とは何か』。東京：岩波書店。

小山 昌久
2005 『ラオスの社会・経済概況と人材開発問題』。石田 正美 編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティア』。東京：アジア経済研究所、所収。Pp.115-137。

在ラオス日本大使館
2007 『ラオス人民共和国の概要と日本との関係－主要指標を中心として－』。大使館編布文書（平成19年7月）。

シーカンサイ、バーカンサイ
2007 『ラオス人民共和国における文化政策とそのインパクトに関する提言－チャンパサックの事例から－』。ラオス地域人類学研究所 編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣、所収。Pp.214-240。

廣尾 伸雄、竹内 潤子
2005 『カンボジアの人的資源開発－現状と課題』。石田 正美 編『メコン地域開発：残された東アジア
観光開発のはざまで：ラオス、カンボジアの観光政策とその国境地帯における影響

のフロンティア』（東京：アジア経済研究所，所収。Pp.90-114。）

ブラトン・ブーンサリット（竹原 茂 訳）
2003 『森林資源』ラオス文化研究所 編『ラオス概説』。東京：めこん，所収。Pp.383-396。

ファン・ラタナヴァン（竹原 茂 訳）
2003 『まえがき』ラオス文化研究所 編『ラオス概説』。東京：めこん，所収。Pp.9-29。

西澤 信善，古川 久雄，木内 行雄 編
2003 『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん。

西澤 信善
2003 『ラオスのプロジェクト』西澤 信善，古川 久雄，木内 行雄 編『ラオスの開発と国際協力』。東京：めこん，所収。Pp.13-32。

日本政策投資銀行メコン経済研究所 編著
2005 『メコン流域国の経済発展戦略』。東京：日本評論社。

西村 正雄（Nishimuira, M.）
2004a Representing “Vat Phou” - An Ethnographic Account of the Nomination Process of Vat Phou and Adjacent Archaeological Sites to the World Heritage List -。早稲田大学大学院文学研究科紀要 第49輯 第 3 分冊。Pp.29-63。

2004b 『ラオス、チャンバサックのランドスケープと記憶』。文化人類学年報-特集：ラオス、ワット・プー地域の文化人類学-文化遺産-記憶-地域文化-1 第 1 巻（早稲田大学文学部）。Pp.21-30。

2005 『チャンバサックの集合的記憶と分有』。文化人類学年報-特集：ラオスとその周辺における遺産-モノ・生活-第 2 巻（早稲田大学文学学院）。Pp.15-24。

2006a 『遺産をめぐる様々な意見-チャンバサック世界遺産登録のプロセスと地元住民の周辺化-中心-周辺の関係の再検討にむけて』。早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター 編『アジア地域文化学の構築-21世紀COEプログラム研究集-』。東京：雄山閣，所収。Pp.283-318。

2006b 『遺産』概念の再検討。文化人類学研究 （早稲田大学文化人類学会）第 7 巻。Pp.1-22。

2007a 『論－ラオス南部の文化的景観と記憶』。ラオス地域人類学研究所 編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣，所収。Pp.1-33。

2007b 『チャンバサックの文化的景観と記憶』。ラオス地域人類学研究所 編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣，所収。Pp.34-55。

2007c 『遺産と記憶－チャンバサックの世界遺産とその維持管理のために』。ラオス地域人類学研究所 編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣，所収。Pp.241-365。

2007d 『国境地帯（ボーター）の人類学－ラオス・カンボジア国境地帯の現在－』。ワセダアジアレビュー No.3。Pp.22-27。

2008 『ラオス、チャンバサック地域の人々の資源獲得パターン－キャッチメント分析の試み－』。早稲田大学大学院文学研究科紀要 第53輯 第 4 分冊。Pp.121-143。

ラオス地域人類学研究所（早稲田大学）編
2007 『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣。

ラオス文化研究所 編
2003 『ラオス概説』。東京：めこん。

山田 綿彦
2004 『チンタナカーン・マイ政策の展開と党・政府人事の変遷』。天川 直子 編『ラオスの市場経済化－現状と課題－』。東京：アジア経済研究所，所収。Pp.11-54。

吉田 恒昭，金 広文
2005 『メコン地域の交通インフラ』。石田 正美 編『メコン地域開発：残された東アジアのフロンティ
Tourism Development and its Impact on the Lao-Cambodian Border Region

Waseda University
Masao Nishimura

This paper intends to pursue two purposes: first, it aims to compare tourism development policies of Lao PDR and Cambodia; and second, it aims to exhibit the on-going development project and its effect on the lives of people residing in the Lao-Cambodian border region.

In this paper, I argue that as in almost all Southeast Asian countries, tourism is the most important industry in Lao PDR and Cambodia. This importance is reflected in the policy of those countries, and as the result, we see hectic change of landscape due to heavy construction of infrastructure throughout those countries, especially in the area along the Mekong river. However, it seems that as much as the policy of each country is different, people's reaction toward the tourism development differs.

In order to examine the aforementioned propositions, and their impact on local culture, field research was conducted in the border region between Champasak Province of Lao PDR and Stung Treng Province of Cambodia.

This research reveals that the policy toward tourism development in both Lao PDR and Cambodia is significantly different, and furthermore there is also a sharp difference in people's perceptions of tourism in these two countries.

Such difference can be seen in the statements of people whom we interviewed. Cambodia has gone ahead in terms of development, including tourism, and the land along the border is now a kind of target for developers to exploit, and therefore people outside Stung Treng, both Cambodians and foreigners, have attempted to obtain large tracts of land and monopolize natural resources. As the result, people who used to traditionally made their living on such resources are no longer able to rely on them, and an increasingly large number of people have moved to other means of making a living, such as fishing. The people of Stung Treng have been suffered from such practices and therefore tend to be negative toward further changes in the landscape through tourism development. They have adapted well to the quickly changing natural environment as well as the socio-economic environment by using their own tactics such as establishment of multiple income resources. The Cambodians look at Lao PDR from this adaptive viewpoint; Lao PDR is one income source, although they believe that they are more developed than people in Lao PDR.

In contrast, Lao PDR, especially Champasak, is at the middle of tourism development. National as well as provincial governments are enthusiastic in promoting tourism. Their strategy is to increase the number of international tourists. For this purpose, the border policy has been loosened. For instance, immigration policy was changed to allow people to enter Lao PDR more easily and increased the number of entry points. According to this trend, the regulation at the Lao-Cambodian border was also significantly loosened. The Lao government and the Champasak provincial government expect more international tourists come to visit from Cambodia, after visiting Angkor. Lao people express their expectation for tourism development. They are positive toward the development.

In short, we see a sharp contrast related to tourism development between Lao PDR and Cambodia. Although the Lao people are enthusiastic about tourism development, Cambodians have a negative reaction.
Through bitter experiences in past decades, they have learned tactics to adapt to changing environments. I would like to conclude that on the basis of research in the Lao-Cambodian border region as the political barriers at the border are lowered, the cultural barriers at the border, instead, are rising through tourism development.